



『ぼくのねこ ポー』大賞

相手の気持ちを考える

2年 N・Hさん

「先生」に伝えておこしたね。」

お母さんは、私にそう言った。けれど、先生に伝つことを忘れてしまい、私ははじめにうをついた。心の中がざわざわして、このままひみつにしたまうがいいのかなと、キドキしてしまった。

私はこの本を読んで、その時の自分を思い出した。谷山君もお母さんや森君にポーのことを正直に話すまでは、私と同じ気持ちだったのかもしれない。私は、自分が忘れていたことをお母さんに注意されるんじゃないかと思つてうそをついた。けれど、うそをついたままでは、なんだか楽しくなくて、正直にお母さんに語つた。やつあると、ギュッとしつれてホッとした。谷山君のすじこといわば、トムのことを、森君に会いたいはずなのにその気持ちをずっとがまんしていたのかもしれない、

と考えたところだ。私だったらうつできただろうか。せつじ、自分のことしか考えられなくて、谷山君のように、相手のことを考えられなかつたと思つ。

この本の中で、トムが森君に会えて喜んだといつを読むと、やさかしたら、生き物や物にも、人間と同じように、その立場に立つて考えることが大切なかもしないと思つた。私はお父さんとお母さんから「人と物を大切にすること」。

よく語られる。これからは谷山君のように相手や物の気持ちを考えて行動できるようになれたらうしなと思つ。そのためにはまず、自分がされたうのうつをかと見てから相手の気持ちを考えてじきたうと思つ。

この本には、トムを森君にかえしたといつまでお話をおわつていただけれど、やつあると、谷山君は、お母さんにトムをつくりのねこをかつてやうつて、ポーと名前をつけて、こつまでも大切にしたと思つ。